

幼児ばなしと赤ちやんばなし

上 澤 謙 一一

◆話し方のちがい

『犬のワンさんがむこうからやつてくると、牛のモーさんがこつちからやつてきました。そうして、ワンさんが「モーさん、こんにちば」というと、モーさんが「ワンさん、こんにちば」といいました』

『ワンワンちやんがね、むこうからきたの。それから、モ一モーちやんがね、こつちからきたの。そうしてね、ワンワンちやんが「モ一モ一ちやん、こんにちば」といいました。そうするとね、モ一モ一ちやんが「ワンワンちやん、こんにちば」といいました』

この二つの文章は同じようですがつています。いや、同じことを、ちがつた言葉でいつているのです。即ち前者は幼児ばなしの話し方であり、後者は赤ちやんばなしの話し方であります。

両方を比較して、まず気がつくのは、筆でいえば文脈、言葉でいえばいいまわしが、前者より後者が短かいことです。

度々切れているでしょう。

幼児ばなしでは『犬のワンさんがむこうからやつてくると、牛のモーさんが』と、つづいているのに、赤ちやんばなしでは『ワンワンちやんがね、むこうからきました。それから、モ一モーちやんがね』と、三つも切れています。これは幼児に比して赤ちやんはまだ思想が連続して働かないので、長くつづくものを理解するのが困難だからです。赤ちやんの場合には、長過ぎるよりは短か過ぎる方が無難です。

次に、前者にない言葉が後者に加えられる、かえつて、長くなつているのに氣づくでしょう。『それから』とか『そうしてね』とかいう接続詞が挿入されていることや、『こんにちば』という挨拶の前に『ワンワンちやんが』とか『モ一モーちやんが』とかいう主格が、重ねて用いられていることなどです。接続詞の挿入は、やはり赤ちやんの思想が連続して働かないのを補うためです。文脈又はいいまわしを短く切つても、切つた前のと後ろのところが思想が連続しているので、絶縁してはなりません。形の上では切つても、觀念と

してはつづけなければなりません。それには接續詞を用いて、その間をつなぐことが最も適當と思われます。主格が重ねて出てくるのは、赤ちやんは物事を觀念化して、頭の中で把持することはまだ充分でなく、従つてそれを把持しつづけることもむづかしいので、より多く外部から刺戟を興えて、ぼんやりする觀念を明瞭にし、消えようとする思想を呼びとめねばなりません。幼児ばなしでは『犬のワンさん』と一度いつただけで『こんにちは』という場合には、改めてワンさんを擧げないのに、赤ちやんばなしではその場合にもう一度繰返すのは、即ち「明瞭にし」又「呼びとめる」手段に外なりません。

それから、前者に比して後者に『ね』という言葉が多いのに氣づくでしょう。この『ね』は、恐らく最も簡單に明瞭に親密の情を表わす言葉でしょう。『なんだ、かんだ、こうだ、なうだ』といつてるところへ『ね』という一言が點せられて『なんだね、こうだね』となると、俄にやわらかみと和やかさが加わつてくるでしょう。實にその『ね』を口にする時は、自然に力が籠つて、齒ぎれのよいひびきを覺えます。だから、言葉の區ぎりのところへそれを入れると、まことに區ぎりがはつきりするのです。

又幼児ばなしで『來ました』といつてるところを、赤ちやんばなしでは來たのといつてゐるのに氣づくでしょう。『來ました』というのは、話の中に出てくるものの動作又は状態を示す言葉で、謂わば客觀的な描寫です。『來たの』とい

うのは、話しかけか説明的な言葉で、謂わば話手が聽手に對する直接的な表現です。従つて前者より後者の方が親しみも深く印象も深くなるわけです。この『の』に前述の『ね』が加わつて、例えば『來たの、ね』となれば、感じも、心持も、一層強く深くなるでしょう。といつて、餘りこれを使うと、かえつて重苦しくなつて、滑かさと快よさを消してしまふことを戒めなければなりません。

兎に角、親しい愛がなければ、直接的取扱でなければ、生きていられない、育つてゆかれないような、又區別や分解に關する觀念活動がまるでないような赤ちやんへのお話は、この點に工夫することを忘れてはなりません。

それから名詞を使わないで、一種の代用呼稱を持出してゐることに氣づくでしょう。幼児ばなしでは『犬のワンさん、牛のモーさん』というのに、赤ちやんばなしでは『ワンワンちやん、モーモーちやん』といつています。これはお話の中に出てくるものと、聽く赤ちやんとを近づけて、親しみを感ぜさせ、理解を容易くさせようとするためであります。

一體「犬」というのは、人間がその動物にくつつけた符號です。それよりもワンという聲の方が、本來具有してゐるものです。犬に遇つた時、犬は『私はイヌです』などといません。そういう代りに『ワンワン』と吠えます。即ちその方が具體的であり、實際的であります。又『犬』という言葉よりは『ワン』という言葉の方がひびきが強く且一種の旋律を含んでゐるので印象的でもあるし、従つていい易くもありません。

だから「犬」というよりは「ワンワン」という方が、遙かに親しみ深く又分かり易いわけです。「犬さん、牛さん」といわずに「ワンワンちゃん、モーモーちゃん」というのも、赤ちゃんは自分が「ちゃん」づけで呼ばれるので、自分で他を呼ぶにも「ちゃん」づけにするのが多いので、それに倣うのが、親愛と理解とを深めることになるからであります。

◆ごんな言葉で

話し方に直結して善題になるのは話し言葉であります。

話し言葉については、年齢が低くなればなるほど、善題がむずかしくなります。というのは、小さければ小さいほど、語彙が少なく、語感が鈍く、従て理解力が浅く、把持力が弱くなるからです。だから、使用し得る語の範圍は、少なくなるに連れて狭くなり、従てその理解度を越えることが多く、興味と感銘を齎らしにくくなるからです。それで話手としては、少年少女期より幼児期が、幼児期より嬰兒期が、言葉の訓練を受けることがきびしくなります。「出来るだけやさしい、わかりやすい、そしてその場合に適した、しかも美しい言葉をさがし出す」ということが、赤ちゃんへの話手としての特別な大切な仕事となるのは、このためであります。

例えば「桃太郎のお話」をずるとして「山へ柴刈りに、川へ洗濯に」といつて、幼児には解るとしても、赤ちゃんにはよく呑みこめないでしょう。犬、猿はよいとしても、雉子は多分不案内でしょう。況んや「鬼が島の鬼ども」というに至

つては、恐らく見當もつかないでしょう。細かく観てくると知らないことだらけです。それを解らせるにはどんな言葉を使つたらいいか？。恐らくどんな言葉を使つても解らせられないのではないか？。惑わさるを得ません。迷わさるを得ません。

實際、觀念又は概念を持つていない者に、そのことを解らせることはできません。「鬼」とか「島」とかいうことを知らない者に「鬼、鬼、島、島」と何べんいつても、解る筈はありません。そこで「鬼」というのは角をはやしてこわい顔をした赤いのが青い」とか、又「島」というのは、水に取巻かれていまする小さな陸」とか説明したとしても、お話の中で一々それを取上げるわけにはゆきません。假に「鬼が島」という代りに「角のはやしてこわい顔をした赤いのが青いのがいる水に取巻かれていまする小さな陸に、桃太郎さんは出かけました」といつてごらん下さい。そしてそれが度々出てきたらどうでしょう。うるさくて、煩わしくて、かえつて考は混亂し、印象は漠然となつてしまつてしまふでしょう。

どうしたらよいか？。それには「鬼」又は「鬼が島」の畫を見せるという方法もあります。それが正しい適當な方法であることは申すまでもありませんが、ここでは「お話」という範圍内で考えることにします。

ところが、お話としても、それを解らせる方法があるので、それはどういふことかといえは「知らないそのことを、知つてゐる他のことの間へ入れて話す」といふことです。知

らない「鬼」だけ「島」だけを、ぼつくり切離していうから分らないのです。それでは思う手がかりも、考える技折もありません。けれども他の知つている事柄に交えていわれ、つづけて話されれば、知るしおり、手がかりが得られるのです。その知つている事柄がなじみが深ければ深いほど、しおり、手がかりは強められます。それは人間の思考には、前後の脈絡とか、相互の關係とかに通ずる、想像とか類推とかいう働きが具わつてゐるからです。そうしてその際その働きが現われて、前後の脈絡をたぐり寄せ、相當の關係を結び合わせて、そこにある未知のものにも、自然に適當な意味をつけるからです。だから、一聯の事柄が示されて、よしんば一部に解らないところがあつても、全體が不可解に陥るようなことはありません。よくあることですが、外國の本を読む時、ところどころに知らない言葉が出てくると、それをとばして抜かして讀んでも、全體の意味は取れます。

一體、お話というものは、その中に現われる人物事件の關係がはつきり示されて、必然的な發展を追つてゆくのが特徴ですから、想像や類推が働き易く、又當たり易いのです。しかも同じお話を何遍でも喜んで聴くのが、赤ちやんの特色です。(幼児もそうですが)。度々聴くうちに、前述のたぐり寄せ結びあわせの作用が、幼ないなり小さいなりに働いて、分らないのがいつとはなしに解つてくるのです。

『山へ柴刈り、川へ洗濯』鬼が島へゆく』という解らない事柄がある桃太郎のお話を、赤ちやんが喜んで聴くのは、或

る部分はわからなくても、大體は解るからです。そうして聴いてゐるうちにだんだんとより多く解つてくるからです。否、解るばかりでない、將來に影響するほどの深い感化を、そこから受けるのです。實に驚くべきことではありませんか。

◆疑問から質問へ

赤ちやん又は幼児への話手としては、やさしい分り易い言葉を選ぶのに苦心努力しなければならぬことは當然ですが、しかしすべてが分かる言葉でなければ分らないということはありません。

それは前述のように、いろいろな心理作用が働くからですが、お話というものには、そういう作用以上に、更に深い深い働きが伴うのであります。

「分かる」というと、私どもは理知の働きに限つて、理屈を追ひ、因果を辿る行き方ばかりが、それを齎らすように思いますが、理知以外に分かる働きも方法もあるので、「心をもつて心を識る」とか「靈犀相通する」とかいわれるのがそれ、一々言葉を解さなくても、底を流れる精神と精神が觸れあうのです。或る場合には、この方がかえつて部分に捉われないで全體を把持し、皮相に止まらないで眞髓に徹するところがあるので。これはむしろ自然に營まれる作用で、無意識的に印象感化を受けることの多い赤ちやんは、こういう類の理解がなかなか多いのですが、時には意識的にはつきり

一つの問題となつて現われることもありません。
『島つてなぬに?』

突然、こんな質問をするのがその時です。

度々同じお話を聴いているうちに、度々同じ「島」という言葉に出遇つて、前後のところは分かるが、「島」が出てくる、必ずつき當たる。そこだけがポツツリ、いつも汚點のように分からずに残る。それでいつとはなくそこにチグハグな感じが起り、おかしいという思が湧き、次第に疑問というようになつて、質問という題式を取つて、外に現われることになるのでしよう。

これは思考の自發活動のはじまりで、非常に意味があるのですが、お話を一層深く理解させる上からも、芽ぐんできた知的要求を伸ばす上からも大切なので、必ず答えるようにしなければなりません。但し答は出来るだけ簡明であるべきです。

『島つて、お水がまわりにくるつとあるところなの』
赤ちやんにはこの程度でよろしいでしょう。

更に聞いたら、更に一應の答をします。飽くまでも一應で、聞いた以上又は以外の範圍にまで立入ることはいりません。

以上は、赤ちやんの話手として心得べき一つの方面ですが、幼児の話手に取つても、答になるところが多いでしよう。

◆兩者の發達のために

さて、幼児ばなしは相當深く研究され、汎く發達している有様なのに、それに比して、赤ちやんばなしは殆ど研究されず、従て發達もしないのは、どういふわけでしょう。

それは必要でないからか、重要でないからかと、けつしてそうではありません。否、それが必要重要であることは、夙くから認められているのです。お母さまのお話とか『家庭童話』とか『ねんねんばなし』とかいふ名稱がよくいわれ『童話を家庭に遺せ』というような聲が屢々聞かれるのは、その一つの證據ですが、それにも拘らず實際に發達しないのは、どういふわけでしょうか。

そつ一つの大きな理由は、そういう名稱がいわれているのに、實際はほんものが無いから、或は極めて稀だからと思われまます。

こういうと。奇矯な言を弄するやうに聞こえるかも知れませんが。しかし現在赤ちやんばなしはお話の世界に於て、赤ちやんばなしとして獨立の位地を與えられ、獨自の研究と成作とが行われているとは觀られません。むしろそれは幼児ばなしの範圍に屬し、幼児ばなしの世界に取入れられ、その一分派と思ひ做されているやうな傾向ではないでしようか。

それは「家庭童話」と銘を打つて出版されたものがあるでしよう。その中にはまことに適當なものもあるでしよう。しかし多くは、嚴密にいえば幼児童話という觀念の範圍外に出

ないようです。「幼児ばなしをやさしくする」とか「短かくする」とか『單純化する』とか、或は『聴く人數の多少のちがひ』とかいう程度で、根本的に幼児ばなしから赤ちやんばなしを區別して、それ自身の立場と態度から生まれたものではないようです。

嬰兒期を幼児期が發達の程度に於て格段の差違があることは、既にさういふ別な名稱がついていゝるのでも明かだ、生理的にも心理的にも、兩日の談でないことは申すまでもありません。だから兩時代の教育方法も實際の取扱も、けつして同じではありません。赤ちやん時代にはガラガラのようなおもちやがほしくて堪りませんが、幼児期になると、見むきもしないでしよう。赤ちやんにはお乳をやることは絶対に必要ですが、幼児には與えたらかえつていけないでしょう。そんなに違つたのに、お話だけが同じ種類のものでないとは、どう考へても不合理です。

それを是正するには、赤ちやんばなしの理論ともいうべきものを示すと共に、具體的な資料を提供することですが、さういふように兩者がはつきり區別されて、初めてそれぞれの正しい發達が期せられるのだと思ひます。何となればそれによつて各々の共通點と差違點が明瞭にされ、從て相互の眞の姿が捉えられ、正確な觀念が得られることになるのですから。

○ 殘 暑

先生。『まだ暑いねえ』

幼児。『……………』

先生。『お休み中、どうしていらしたの？』

幼児。『……………』

先生。『毎日おひるねしていらしたの？』

幼児。『……………』

先生。『まだ暑いから、お部屋で靜かにしていらしようよ』

幼児。『……………』

先生。『あら、そんなに馳けて、汗が出ることよ』

幼児。『……………』

先生。『もう少しお休みだといふのねえ』

幼児。『……………』

先生。『きようは、早めにお歸りにしましょうか』

幼児。『……………』

先生。『あした一雨ぐるといふのね』

幼児。『……………』

先生。『いつまで殘暑かしら』

幼児。『……………』

(以下略)